



オルタナティブ 文明論

田坂広志

日本が世界をリードする 五つの価値転換

前回、グローバルな諸問題が深刻化するなか、我々人類に求められている「新たな価値観への転換」とは、日本人にとっては、「懐かしい価値観への回帰」であることを述べた。

第一は、「無限」から「有限」への転換。

地球環境問題によって、「無限の空間と資源」を前提とした価値観は壁に突き当たり、それを「有限の空間と資源」を前提とした価値観へと転換していかなければならないことは、広く認識されるようになった。しかし、この日本という国は、昔から、狭い国土と乏しい資源を前提とした、「有限」の価値観による文明と文化を形成してきた。

第二は、「不変」から「無常」への転換。

欧米的な価値観は、「絶対的な神」「永遠の真理」といった言葉に象徴されるように、「不変」であることを価値としてきた。しかし、いま世界は「ドッグイヤー」という言葉に象徴されるように、極めて変化の速い時代に入っており、変わりゆく価値観に、しなやかに適応することが求められている。こうした時代であって、この日本という国は、古くから、物事は常に変わりゆくという「無常観」を前提に、文明や文化を形成してきた。

第三は、「征服」から「自然」への転換。

欧米的な価値観は、これまで自然を「征服」の対象として見つめてきたが、地球環境問題によって、自然との「共生」を重視する価値観へと変化してきている。しかし、この日本という国は、昔から、自然を征服の対象とは考えなかったばかりか、共生の対象とさえ考えなかった。なぜなら、日本においては、自然

を「対象」とは見なさず、自分自身が自然の一部であるという「自然」の思想が育まれてきたからである。

第四は、「対立」から「包摂」への転換。

欧米的な価値観が、真偽、善悪、美醜など、すべての価値を二項対立的に捉え、それがしばしば紛争や戦争の原因になってきたが、日本的な価値観は、「大乘仏教」や「八百万の神」の思想に象徴されるように、異なった様々な価値観を寛容に受け入れ、包摂していくものである。こうした「包摂の思想」は、様々な価値観や文化が共生するべき時代において、その重要性はさらに増していく。

第五は、「効率」から「意味」への転換。

欧米的な価値観は、物事を、「速さ」「大きさ」「強さ」といった「効率」の観点から評価する傾向が強いが、日本的な価値観は、「遅いこと」「小さなこと」「弱いこと」にも大切な「意味」を見出す。「急がば回れ」「大器晩成」という言葉や、「一遇を照らす、これ国宝なり」「弱さの強さ」という思想は、まさに日本的な価値観に他ならない。

では、こうした「世界的な価値観の転換」の時代を迎え、日本が進むべき道は、何か。

次回、そのことを語ろう。

たさか・ひろし 81年東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国バテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年社会起業家フォーラムを設立。08年世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に『目に見えない資本主義』『未来を予見する5つの法則』など60冊余。



Illustration : Hattaro Shinano